

神の指がふれた時

—— G・タイサー夫人が語る、完全ないやしの奇跡！ ——

G・タイサー

▲アガペー書店

神の指がふれた時

——G・タイサー夫人が語る、完全ないやしの奇跡！——

G・タイサー

 アガペー書店

The Evidence of His Power

Gertrude Ticer

© 1972 by Christian Growth Ministries

Originally appeared in New Wine Magazine,

Reprinted with permission.

中もくじ

はじめに	(7)
(一) 信仰のはじまり	(16)
(二) 望みえなくともなお信じる	(22)
(三) いやされるには、靈的準備が必要です	(25)
(四) ビジョンによる確信、確信	(31)
(五) 神の使者、ピアトリス	(37)
(六) イエス・キリストの来訪、奇跡	(43)
(七) あかしのため歩きまわる	(49)
(八) 後日談つきのあかし	(54)
(九) イエスさまに従います	
おわりに	

盲人が見、足なえが歩き、
らい病人がきよめられ、つんぼの
人が聞こえ、死人が生き返り、
貧しい者には福音が宣べ伝えられ
ているのです。

(マタイによる福音書・二一章五節)

はじめに

“わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。”

(ヨハネ・11の25、26)

ガートルード・タイサーは、もう老年で、孫から「おばあちゃん」と呼ばれる年代です。しかし、このあかしをした時も、たいへんぴんぴんしていて、健康そのものだったといえます。

この人に起こった奇跡——何度となく死にひんした不治病から、瞬間的に解放され、いかに完全な健康を与えられたか。また、毎日どんなによろこんで暮せるようになったかを、できるだけ多くの人々に聞いてもらい、たくさんの方々、ガートルードが手にした健康と幸福を、ご自分のものでしていただきたいと願います。

このストーリーの中でできごとは、ガートルードの実際の体験で、疑う余地がありません。

神の御子イエス・キリストは、確実に生きておられ、必要とあれば、その生ける実在のお姿を

現われますし、聖書の時代と同じように、私たちに、神さまの愛と力を注いでください。

イエス・キリストの十字架は、あらゆる人の病苦、束縛や圧迫からの解放と、死への勝利、悪の力への勝利である、という聖書のことばは、真実です。

ガートルードはあかしの中で、「ぜひ知る必要があるのは、聖書を正しく認識して、その真理を、生きた経験として体得することの大切さ。」について語っています。

それには、実在の神さまが、自ら所有しておられる偉大な力……光を送り、宇宙を運行させ、エネルギーを分配し、命と愛と息とを、人間とすべての生けるものに分け与え、生も死も支配している、おどろくべき全能の力を信じ、事実として認めることが、出発点になっています。

聖書を読むと、神様のご性格は、愛であることがわかります。地上に來られたイエス・キリストの、ことばと行動が、そのことをもつとも良く現しています。

神の御子イエスの愛のほとばしる力が、目に見えない聖霊を通して、イエス・キリストを信じる人の中に流れこみ、新しい生命を与えるよう、神さまは備えてくださっています。

十字架上で、神の御子が私たちに分け与えてくださった、彼の愛と命の力。これこそ死をも打ち破る、奇跡の力なのです。ガートルードが経験した、驚嘆すべき奇跡も、まさしくその力によったのです。

(一) 信仰のはじまり

あなたは、長い長い間、病気——それも、世界中の名医が、よってたかつて治そうとしても、とうてい治る見込みのない、死を待つばかりの病気になって、苦しんだことがありますか？

まあ、考えてもみてください。ただ病気のベッドにくくりつけられたまま——お医者さんたちにとつては、それが患者に対する親切なのですけど——、自分は、このままどうなっていくのだろうと、あれこれ予想して暮すなんて、とてもいいものではありません。

こういう私が、なんと十五年以上もの長期にわたつて、不治病とされている、筋ジストロフィ——にかかつて、闘病生活を送つたのです。

もし私が、今も生きて私を愛してくださっている神さまを、信じていなかったとしたら、とうてい、持ちこたえられなかつたでしょうし、その前に、私のお墓が建つていたことでしょう。

病気にかかる前の私というと、所属していた教会で、まじめに働く忠実なクリスチャン——と

自分では思いつつ、毎日一応順調に暮していました。ふだんは、子どもや孫たちから、「ガートルードおばさん」とか、「ガーチャャーおばあちゃん」と呼ばれ、まあまあな生活でした。

けれどある日、「筋ジストロフィー」という、やっかいな病気にとりつかれてからは、私の生活は、たいへんなものに変わっていききました。

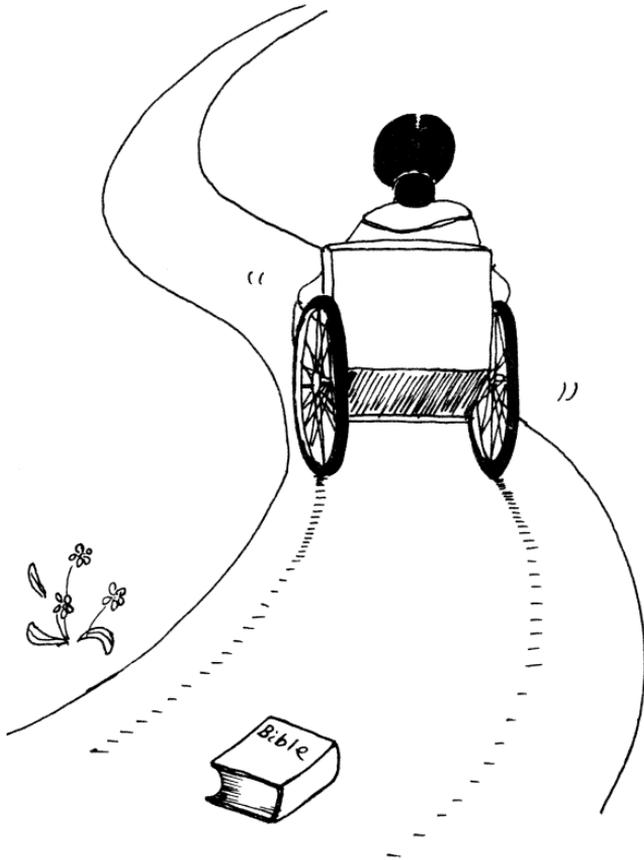
それは、いきなりではなく、だんだんとやってきたのです。

最初のうち私は、歩くたびにつまずいたり、なんでもないような場所でも、ころんだりするようになりました。

それがちよつとずつひどくなっていき、一日のうちに、何回もころぶようになりました。おかげで私の身体は、しよつ中ケガや骨折だらけで、ついに、車イスに乗らなければ、外出も生活もできないまでに悪くなっていき、病院にも通い続けました。

それでも私は、いぜんとして、日曜日が来るごとに、きちんきちんと教会に出席していました。その教会では、神さまの力による、実際のいやしについて、何も教えてくれませんでした。ただ「その昔、イエスさまとその弟子たちが、一時的にそういうことをなされた」という、昔ばなしみたいな教えに、すぎませんでした。

病院に行くと、どの医者もみな、むずかしい顔をするばかりで、「治る。」という答えを、聞く



ことはありませんでした。医学的にも、他のどんな方法によっても、私の背負いこんだ病気が、治るといふ望みなど、ぜんぜん持てなかつたのです。

みなさん、このことが、もし自分に起こつたとしたら、どうでしょう？ おそらく、失望におとし入れるに充分な理由として、その事實は、たえず自分の前にどっかりと置かれ、毎日悩みにこと欠かない、とお思ひになりませんか？

私がそうならなかつたのは、ほんとにふしぎで、神さまの恩恵としか、言いようがありません。というのは、『筋ジストロフィー』だとわかつてからも、人が何と言おうと、私は心の中で、「イエスさまが、私を治してくださいさる！」

と、固く信じていて、死ぬ心配や、さまざま悪い予想を、はらいのけられたからです。

私が読んでいた聖書には、こう書いてありました。

「神にとって不可能なことは一つもありません」（ルカ・1の37）

そうです。このことばだけでなく、聖書を通して、神さまは私たちに、とてもはつきりと、教えておられます。神さまは、

「彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」（イザヤ・53の5）

「見よ。主の御手が短くて救えないのではない。」

その耳が遠くて、聞こえないのではない。」（イザヤ・59の1）

「神よ。私はあなたを呼び求めました。」

あなたは私に答えてくださるからです。

耳を傾けて、私の申し上げのことを聞いてください。」（詩篇・17の6）

「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも同じです。」（ヘブル・13の8）

と、語りかけておられます。

ところであなたは、このような聖書の中のことばが、これまでに、あなた自身、何かの問題にぶつかった時、あるいは、夢も希望も持てない空虚な時などに、あなたの心にひびき、あなたにとって生きたものとなった、という経験がおりますか？

あなたに影響をもたらした、その聖書のことばがキー・ポイントになって、問題も悩みも、良い方向へと流れを変えてゆくのを知る体験は、とても貴重なものです。

私の経験について言えば、「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも同じです。」という、ヘブル・13の8のみことばを読んだ時、このおどろくべき真理に目を見はりました。そして、今も彼——イエス・キリスト——は、正真正銘生きておられ、生きておられるならば、今彼は、人々をいやしておられるのだ、という真理が、私にとって最初に生きたものとなって、心の中に働きはじめました。

聖書の中の、このことばによって力づけられた私は、ひき続き聖書を手にとると、旧約聖書をめぐり、神さまとモーセが、語り合うところを、読みました。そして、出エジプト記・3の13、14に、こんなふうに書かれているのを、再発見したのです。

モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました』と言えば、彼らは『その名は何ですか』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。』

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある』という者である。……」

モーセに、『わたしはある』と言われた神さまは、モーセの昔から、今日にいたるまで、そしていつまでも同じお方だ、ということを私は悟って、よろこびでいっぱいになりました。

なぜって、その『わたしはある』という神さまは、はるか昔にちよつとの間だけいらした神さまではなく、今日、現在も、そして永遠に生き続けておられる、実在のお方なのですから。

このことを、はっきりと心にきざんでから、私は、使徒行伝・10の34を読みました。すると、

「……これで私は、はっきりわかりました。神はかたよつたことをなさらず……」

と、書いてあるではありませんか。私はさつそく、神さまに申し上げました。

「神さま、イエスさまが、昨日も今日もいつまでも同じお方であつて、かたよつたことをなさらず、そのイエスさまの打たれた傷によって、私たちが癒されると、あなたは語っておられますね。ああ、これらのことは、まるで私のために、あなたが語ってくださったように、今の私にぴつたりです！」

ほんとに、聖書にあるたくさんのみことばの中でも、この三つは、とりわけ私の心と状態とにぴつたりきました。それは、私の信仰心と呼びさますに、じゅうぶんでした。また、この三つの

みことばは、その後の私が、イエスさまのいやしの力を信じ続け、希望を持ち続けて、生きられる底力になったみことばでした。

「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」

という、ローマ・10の17のみことばは、まさにこのような、信じる者の態度の大切さを、教えています。

私たちが、イエスさまを、個人的に救い主として受け入れた時から、神さまは私たちを信ずる者とみなしてください。そこから、私たちの信仰による歩みが、開始されるのです。そして、もししっかりと信じた信仰を持って、充実した人生を生きたいという望みが、私たちの中に芽生えてきたならば、その時はなによりも、まず聖書を読み、みことばをたくわえると良いのです。

なぜかという、万物の主であられる神さまが、ご自分で語られたみことばを、私たちがぜひたいに疑わない、ということが、信仰の第一歩だからです。

「私は、主のみことばを信じて、けっして疑いません。」

という信仰が生まれると、いつもその結果は、神さまから正しく答えられることがわかり、

「神さまのみことばは、真理であり真実でした。私は神に感謝し、従うことを喜びます。」
と言えるようになり、最も力強い信仰による生活が、私たちの中に築かれてゆくのです。

あなたが聖書を読む時、その中から、ことにあなたの心にひびいてきたり、はっと気づかされたりするみことばに出会うなら、それは多くの場合、あなた自身のために、神さまが語りかけてくださっているもの、と受け取って良いでしょう。

神さまはまた、直接その人の耳に聞こえるように、お声をかけて語られたり、聖霊によって心の中から、語ってくださることもあります。

どういう方法であれ、神さまが語ってくださる時、そのみことばをよろこんで受け、信じるなら、あなたは必ず、神さまから、良いご返事をいただけることを知るでしょう。

(二) 望みえなくてもなお信じる！

さて、私が見こことを信じて、希望を持っていることはまったくうらはらに、病状の方は悪くなってゆき、日がたつにつれて、四肢が少しずつマヒしていききました。

神さまが治してください——と、これほど固く信じているのに、どうしてすぐに治していただかず、病気が悪い方へ向うのか、たいていの方々は、ふしぎに思われることでしょう。

はじめのうち、私にも、その理由がさっぱりわかりませんでした。けれど、やがて神さまの導きを知らされてゆくにしたがつて、神さまが、どのように私を、とり扱ってくださいったのか、その心が、どんなに恵みに満ちたものであるかを教えられ、心から感謝したものです。

——マヒが進み、もう通院しているだけでは、まにあわなくなってきました。

そんなある日のこと、病院から往診に来てくれた医者が、こう言いました。

「……ガーチャーさん、あなたはこのままだと、マヒが進んで、目まで見えなくなりますよ。」

そして、その診断のとおり、それからしばらくして、私の両目はぜんぜん見えなくなり、つい

に盲目になってしまいました。マヒが、視神経にまでおよんでしまったのです。

さらに数日たった頃、なん人も医者、私のところにやってきました。

「たいへんお気のどくですが、ガーチャーさん、あなたの全身は、今から二十四時間以内に、完全にマヒしてしまおうでしょう。私たちは医師として、あなたを家で寝かせておくわけには、いきません。ぜひとも、入院してください。」

この勧告は、私にとって、いささかショックでした。でも、イエスキマが治してくださることを、あれから後ずつと信じていましたから、希望を失わずにすみしました。

まもなく救急車がついて、私は病院に運ばれていきました。

その途中、私はタンカの上で、ふとあることに気がつきました。そこで、タンカをかついでいる白衣の男の人に、声をかけました。

「もしもし、すみませんけど、みなさん、なにか忘れものをしてきたと思いませんか？」

「えっ、忘れもの…… さあ、なにかあったかなあ。」

「あのね、私のクツのことですよ。お忘れになったでしょう？」

「はあ？ クツは忘れました。ですけど、ガーチャーさん、あなたなぜクツが必要なんですか？
だって、クツがあったところで、ガーチャーさんは、立って歩けやしないでしょうに。あなたに

は、もうクツなんていらないますよ。」

白衣の男の人たちは、げげんそうに私をながめ、首をふりました。私は、はつきり言いました。

「いいえ、とんでもない。私には、きつとクツが必要になるんです。近いうちに、必ずイエスさまが、私を治してくださいます。だから退院する時に、クツがないと困るんです。」

私は心の底から、そう信じていました。

彼らは、私の言っていることを、病人のたわごとぐらいにしか、考えていなかったかもしれませんが——。神さまの力を、経験したことのない人たちにとっては、無理もないことです。

私のクツは、入院の時には、とうとう届けられないままでした。私のまわりで、私の言うことをとり合ってくれる人は、ほとんどいませんでした。



それはともかく、同じ頃私は、信じ続けている神さまのいやしを、現実には、どのようにして獲得したらよいか——ということをしきりと考えるようになりました。

私を治してくださいるようにと、それまでにも、たくさんクリスチャンの友人や、家族が、私のために祈ってくれました。私は、そのすべての祈りを、心からありがたく思っています。またそれらの祈りは、神さまの耳に届いている、と信じていました。

私たちを見守っている神さまは、私たちがだれかのために祈る時、その祈りを聞き、考慮してくださいるにちがいありません。たとい、ただちに答えられないとしても、み心になつた祈りなら、答えられないということはありません。

しかし、これらのことにもかわかわらず、入院後私は、三回の心臓発作と、一回の脳いっ血に見舞われました。発作が始まると、私はすぐ酸素テントの中に運びこまれました。せまくるしいテントの中でしたが、私はいつも、

『こんなテントの中でも、イエスさまと私が、いられるだけのスペースがある……。』
と、感謝しました。呼吸が苦しい時でも、声を出して祈るようにしました。

ある時、声を出して祈っていたら、看護婦から、

「声を出してしゃべってはダメよ。呼吸のムダづかいになるから。」

と、注意されました。そこで私は息をひそめ、かすかな声か、心の中で祈ることにしました。その結果、祈る時は、必ず声を出して祈らなくてはならない、と考えていたことが、まちがいだつたことを知りました。

イエスさまは、真実をこめた心からの祈り、心を注ぎ出して祈る祈りならば、どんな小さな声……声にならない声でも、ちゃんと聞きとつてくださいます。

私が心の中で祈るようになってからも、イエスさまが臨在なさっている時にのみ感じられる、あのあたたかな魂の平安に満たされ、祈りが聞かれていること、遠からず、神さまからの答えがあることを、確信できました。そして、切願のような祈りをくりかえしていました。

『主イエスさま、どうか私にふたたび完全な健康を与えてください！ 今よりもすこし良くしてください、というのではなく、もう一度、完全に健康にしてください。』

祈りながら私は、イエスさまが盲人の男に、

「わたしに何をしてほしいのか。」(ルカ・18の41)

とたずねられた時のことが、頭に浮かびました。その男がきわめて単純に、また正直に、

「主よ、見えるようになることです。」

と、目の前におられる主に、望みを告げた時、主はすぐに、見えるようにしてくださいました。

この盲人の男に、ただちに答えてくださったイエスキスは、私にもきつと、答えてくださる、でも、そのためには、卒直に、自分が求めていることを、申し上げる必要があるのだ、と気がつきました。私もさつそく、イエスキスに申し上げました。

「主よ、私の望みは、完全な健康体にしていただくことです」。

(三) いやしのためには靈的準備が必要です

それからというもの、主は私を治してくださいるために、まず私の心の中を診察なさり、私の中にある、さまざまな考えや認識について、私をとり扱われ始めました。

私は、病床につく以前の二十五年間というもの、教会でコツコツと働いていましたし、自分では、できる限りまじめに生活していた、と思っていました。

ところがイエスさまは、そうお思いにはならなかったのです。

「ガートルード、あなたはいつでもあなたの隣人を、自分自身を愛するのと同じように、愛してききましたか？」

と、ある日イエスさまが、お聞きになりました。

「いいえイエスさま、好意を持ってない人にまで、そんなふうにあつて愛することなどできません。」

と、私は答えました。するとイエスさまは、イエス・キリストの愛によって、隣人を愛する方法を、教えてくださいました。

「あなたは、私があなただの中に宿るようにと、聖霊によって与えた私の愛をもって、隣人を愛することが、できるはずです。」

と——。そうです。主は、私やあなたの中の心に、イエス・キリストを信じたその時から、お入りくださり、内住のキリストとして、お住みになつて居るのです。

しかも、その私たちひとりひとは、世界中を包み込む愛（神さまの遍在）の中に、動き、存在しているのです。ふしぎなことですが、これは真理です。それなら私たちも、キリストの愛によつて、隣人を愛することができるようです。

また次に主は、私が今まで「罪」とは考えずにいた疑い・恐れ・不信仰について、私をとり扱つてくださいました。これらの靈的束縛から、私が解放されるように、神さまに信頼することを教えてくださいました。

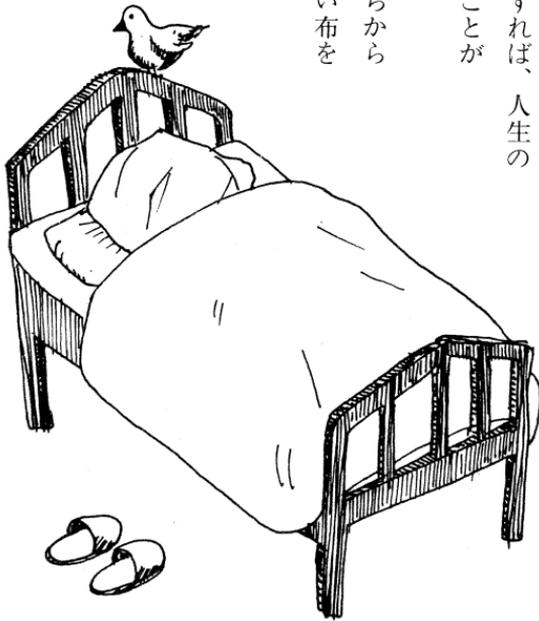
さらに主は、その後三ヶ月間にわたつて、神さまの聖なる考えに従わない、私の内側にあるもの……私自身から出た考えや、私自身の意志……についてお示しになり、考えも意志も、主に明け渡すようにと、導いてくださいました。

その一方、あいかわらず、私の病状は悪化の一途をたどり、ついに私の身体は完全にマヒし、イエスさまに話しかけるほかは、なにもできなくなりました。

それは私にとって、「苦しみの時にも、いつもいつも主が共にいてくださる——。」ということを実感として知る、良い機会になりました。

私たちは、どんな状況に落ちこもうと、私たちを愛してくださる主が、いつもそこにいてくださる——というみことばの真理を知りさえすれば、人生のあらゆる絶望状態にも、よろこんで耐えることができるようになります。

そうしたある日のこと、私は病院の人たちから死んだと思われ、あつという間に、顔に白い布をかけられてしまったのです——。



(四) ビジョンによる確信・確信

私はあの時、仮死状態にすぎなかったのに、ついに火葬場送りになる——というハメに、おちいらずにすんだことを、神さまに感謝しています。

ひとりの、実に気のきく看護婦の手によって、私の顔にかけられた白い布は、とりはずされませんでした。私は、彼女にも、心から感謝しています。彼女が、私のたったひとつのサインをおくれる器管だった、一本の指のかすかな動きを発見してくれなかったら、どうなっていたことか——。

なにより感謝なことは、主が私を生かしておいてくださった、ということでしょう。

主による完全ないやしが行なわれる時が、主のカレンダーの中に、あらかじめ記されていたので、神さまが、私の死をおゆるしにならなかった、と私は信じています。

ところで私は入院中、お見舞いに来てくれる家族や友だちに、いちいち、

「こんど来てくださる時に、ぜひ私のクツを、持って来てくださいな。イエスさまが、私を治し

てくださった時、私は立って歩けるようになるんです。そしたら、クツが必要になるにきまっていますから。」

と、たのんでいました。けれど、だれひとりとして、とりあってくれませんでした。

だれもが一樣に、『ガーチャー・タイサーは、不治病だから、治りっこない。どうやら死にかかっているらしい。早く天国に行った方が、苦痛から解放されて、安らかになれるのではないだろうか』と考えはじめていたかも知れません。当時の私のようすからして、無理ありません。

ある日院長先生が、病室を訪れました。そして私に、おもむろに質問しました。

「ガートルードさん、きょうはあなたに聞いてみたいことがあつてね、……聞きにくいんだが、あなたは、自分の状態についてどんなふうに考えているのかね？」

一瞬、なにを聞かれているのか、私にはわかりませんでした。院長先生が、冗談を言うために、わざわざ私を訪ねてくださると思われなし……。

「院長先生、冗談をおっしゃっているんでしようか？」

と、えんりよなく聞き直してみました。

「いいや。私は、まじめな質問をしているつもりですがね。」

「そうですか。……では、私もまじめに答えなくては。」

「もちろんですよ。ガートルードさん。」

「……では、私の考えていることを言いますと、私は今のところ、自分は生きている人間そのものだ、と自分のことを考えておりますよ。けっしてそれ以上のものでも、それ以下のものでもない、とね。もつとも、やっかいな病気で、苦しんじやいますけど。」

私の答えに困った院長先生は、

「あたりまえですよ、それは。ガートルードさん、私はあなたに、あなたの病状についてどう思っているか、を聞きたいんですがね。」
と、言い直しました。

実はその前日の夜、私は、時々おそってくるケイレン発作のために非常に苦しみました。発作の間にノドがかわき、水が飲みたくても、医者も看護婦も水を飲んではいけなと言いました。なぜかという、もし私が水を飲むひょうしに、タイミング悪くケイレンがきて、自分の舌でノドをふさがれ、死ぬことになってはいけない、と心配されたからです。

おかげで私は、ノドもカラカラ、声を出すのさえ、やっとの状態でした。翌日の私にとって、院長先生の質問に答えることは、一大作業でした。

「……院長先生、私としては……この病気は、もうじき治って、クツをはいて歩けるようになる

だろう、と考えていますよ。」

「……………」

しばらく沈黙の後、院長先生が口を開きました。

「ガートルードさん、どうやら私は、まずい質問をしてみましたよ。まあ、気を悪くしないでください。いささか言いにくかったんでね……実は、お気のどくですが、今あなたが言われたようにはなるまい、と申し上げねばなりません。つまり……あなたは今後ともずっと、このままの状態にいるほかない、とね。」

私は、おどろきもせずに言いました。

「院長先生、おことばによれば、私は今のまま、ずっと変わらないという診断ですね？」

「ええ、まあ、そういうことです。」

「おお！ 院長先生は、私の主イエス・キリストのことについて、少しも考えておられないんですね。はい、主はきつと私を、いやしてくださいます！ そして必ず、クツをはいて歩けるように、なれるにちがいないんです。」

しかし、院長先生は苦笑して、

「ああ、そのことね。それはあなたの夢、錯覚にすぎませんよ。」

と、言っただけでした。院長先生も、やっぱり聖書のみことばを、本気にはいませんでした。私は信じていました。目に見える状態が、どうあろうとも。

あなたは、神さまが、アブラハムに大きな祝福を与える前に、天から幻を与えてくださったことを知っていらっしやいますか？（創世記・15の1）

それと同じように、主は私にも、私が立つて歩いている姿の幻を、与えてくださいました。それからというものは今までよりもっと強く、

「イエスさまが、私をいやしてくださる！」

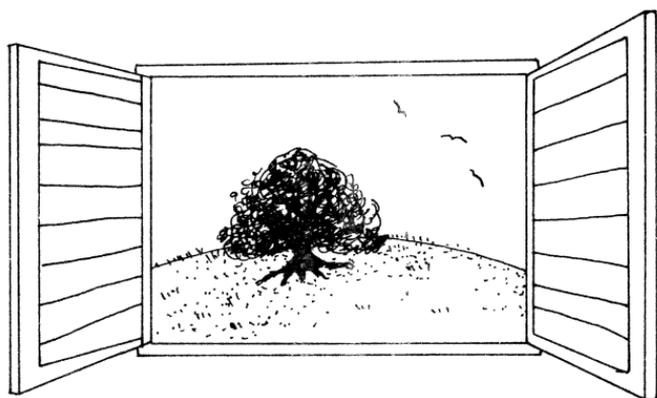
という確信を、ゆるがずに持つようになりました。

——その後また、なん日かたつてからのこと。

私もだんだん病室にばかりいることに、あきあきしてきました。ちょうど用があつて病室に入ってきた看護婦がいたので、

「すみませんが、病院の庭までつれていってもらえないでしょうか？ 外に出てみたいんです」と、言ってみました。

私がまだ、いくらか歩ける状態だった頃、よく散歩しに行った庭には、ほどよい木陰をこしらえてくれる、緑の木がありました。そこへ行って休めたら、さぞさわやかな気分になれるだろう、



と思ったわけです。

私のたのみごとを聞いた看護婦は、あまりいい顔をしないで、すぐ婦長さんを呼びにいきました。

まもなく婦長さんがやってくると、私に向かって、いやにきつい語調で言いました。

「ガートルードさん、あなたを庭までつれていくには、いったいなん人の手を借りなくちゃならないか、そのくらいのこと、あなただつてわかるはずですよ！ よく考えたら、ベッドごと移動しなければならぬでしょ？ あなたの願いは、自分勝手な無理な相談ですよ。」

なるほど、と思って聞きながらも、私はひどくみじめな気持になって答えました。

「はい、婦長さん。たしかに無理でしたわ。お願いはとり消します。」

(五) 神の使者、ビアトリス

それは、とつぜんのことでした。

ある日、なんの前ぶれもなく、ビアトリスという名の婦人が、私の病室を訪れて、私に、

「あなたは、神さまがあなたをいやすことができる、と信じていますか？　そしてそのために、だれかに祈ってほしいと、考えていますか？」

と聞いてきました。私は、質問の両方に「はい。」と答えました。するとビアトリスは、しばらく私のために祈り、帰っていききました。

彼女が病室を出ていく時、私の耳に、イエスさまのお声が聞こえてきました。

「私はこの人を、あなたのためにつかわしました。」

目が見えなくなっていた私は、今訪ねてくれた婦人が、どんなようすの人だったか、かいてもく見当がつかなかったのです。ただ必死になって彼女を呼び戻そうと、声をあげました。隣りのベッドの人を呼んで、さきほどの婦人を呼び返してくれるよう、たのものがせいっぱいでした。

その人の労で、彼女が私のところまで戻ってくれた時、私は、

「たった今、イエスさまが私に、話しかけてくださったんです！　主が、私のために、あなたをつかわしてくださったって。」

と叫びました。ビアトリスは、うれしそうに、

「私を呼び戻してくださって、ありがとうございます！　私もね、マリーランドの自分の家にいた時、イエスさまが私に、『ラスベガスにいつて、不治の病氣の人々を訪問し、その人たちに、いやしのために祈ってほしいかどうか、聞いてごらんなさい。』と、語ってくださったのよ。」

と言い、それから、

「その時主は、『そのうちきつとある日、私のために、主があなたをつかわしてくださった』という婦人に出合うでしょう。あなたはその婦人のために、祈ってあげなさい。』と、おっしゃったのです。」

と言いました。ビアトリスは私を見つめると、

「ガートルードさん、あなたは、神さまがその病氣をいやしてくださる、と心から信じていますか？　そして、いやされるように、この私に祈ってほしい、とお考えですか？　……いましてたこの病院にきて、各病院にきて、各病室を回って、患者さんたちに同じことを聞いて歩きました

けど、みなさんのよそよそしい態度に、がっかりしていたところなんです。」

——ああ、私はなんといいあわせ者！ 私は感動しながら彼女の話聞いていました。

ピアトリスは、神さまの計画を実行するために、わざわざアメリカ縦断の旅までして、はるばるここまでやってきましたし、そのいやしを必要としている当人は、この私なのですから！

ピアトリスは、だれのために祈ればよいかがあったので、とてもうれしそうでした。そしてただちに、食べ物も水もとらない三日間の断食に入り、暑いさ中にもかかわらず、断食の祈りを導いてくださる主のうながしに従い、祈り続けてくれました。

彼女と私が始めて出会ったのが、七月一日。彼女は、次の晩もその次の晩も、私のために病室を訪れ、特別に祈ってくれました。私は、ピアトリスが、イエス・キリストの深い愛に動かされて、初対面の私のためにしてくれた、真剣な導きと祈り、また親切に対して、どう感謝してよいかわかりません。

その断食の祈りの最中に、最後の試みともいふべき状況が、彼女と私をテストしました。



断食から数日たった七月四日に、私と同じ町に住んでいる孫が、お葬式の準備をするよう、親類や近所の人たちから勧められている……というニュースが、ビアトリスの耳に入りました。そのお葬式とは、もちろん私——ガーチャー・タイサーの死に際し、のためです。

ビアトリスは、そんなニュースにはすこしも影響されることなく、確信に満ちて、私のところにやってきました。彼女は私のかたわらに座ると、

「ガートルードさん、神さまは必ずいやすことができる、とあなたは今も信じていますか？」と私にたずねました。

「はい、信じています。」

「今でも？」

「今でもです。」

私も落ちついていました。ビアトリスは、厳しゆくになって、

「これが最後のチャンスです。今このチャンスを逃がしたら、神さまのいやしが行われることは、二度とないかもしれない、ということがわかっていますか？」

と聞きました。私が、

「はい、わかっていると思います。」

と返事すると、ピアトリスはまた質問しました。

「ではあなたに聞きますが、もし私が、コップ一ぱいの冷たい水を持ってきて、あなたのベッドの横に置いたとします。その時、ちょうどあなたが、とてもノドがかわいていたとすれば、その水を飲みさえすれば、ノドのかわきはうるおされる、ということ信じますか？」

「はい、もちろんですわ。それは、とても信じやすいことです。」

「では、もし私が、コップ一ぱいの水を持ってきて、あなたのベッドのわきに置いたとします。けれども、あなたがその水を飲むとせず、飲まないでいるなら、あなたはその水でノドをうるおせる、と信じていながらも、いぜんとしてノドのかわきは変わらない、というわけです。なぜかといえば、あなたは頭と心で信じていても、その水を飲むことをしないからです。」

「……………」

「つまりあなたが、いやしについても、これと全く同じことをしているのが、私にわかったのですよ。あなたが救われた時、あなたが個人的な救い主として、イエス・キリストを受け入れたように、このことでもあなたは、神さまから現実的にいやしの力を受けとり、奇跡を体験する必要があります。」

「現実的に……………受けとり……………体験する……………奇跡。」

「そうです、ガートルードさん。どんなに、『神さまがいやしてくださる』と固く信じていても、いやしそのもの、いやし主そのものを受け入れなければ、あなたが信仰によって神さまの力を受ける接点がありません。」

「……いやし主そのものを、受け入れる……」

「考えてみてください。イエス・キリストの十字架による救いを信じ、自分の体験として救いを信じていてさえも、救い主なるイエスさまそのものを、心の中に受け入れないため、救われる前とすこしも変らない、よろこびも勝利もない生活をしている人が、たくさんいます。……あなたも、自分のいやしについて、このケースと同じように、とりあつかってきたと言えますね。」

「どういう意味か、だんだんわかってきました。ピアトリス。」

「ガートルードさん、あなたは、神さまによるいやしのわざを信じると同時に、たった今、このいやしを自分の中に、受けとってほしいのです。それが、真の信仰というものですわ。」

「……おお、主は、私たちの心の意図を知っておられる、私たちの霊的状态を知っておられる、私たちが、神の偉大さと偉力を、ほんとうに信じているかどうかを、知っておられます。」

(六) イエス・キリストの来訪——奇跡！

「私は主、あなたをいやす者である。」（出エジプト・15の26）

「私は水のように注ぎ出され、私の骨々は、みなはずれました。」（詩篇・22の14）

「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によつて

私たちはいやされた。」（イザヤ・53の5）

「イエスは手を伸ばして、彼にさわり、『わたしの心だ。きよくなれ。』と

言われた。すると、すぐに彼のらい病はきよめられた。」（マタイ・8の3）

神さまは、いやし主として御自身を現わされ、また、イエスさまが、御自身の十字架を通過し

てくださったことにより、私たちは、ただいやしを受けとりさえすれば、いやされるのです。

ピアトリスは、手を上げて祈るようと、私をうながしました。私は、受けとる行動をするために、いやし主であるイエスさまに、心を集中して祈りはじめました。

手を上げて祈ると言っても、まだたった一本の指しか動かすことができませんでしたから、その指を上げて、信仰によって意志を行動に現しました。

「主イエスさま、あなたのいやしを受けとります！ それをコップの水を受けとるように受けとり、信じます」。

と主に祈りました。ところが、それまで考えになかったことですが、私の心に恐れが生じました。「主イエスさま、私の内がわに、今恐れがあります。なぜかわかりません」。

と、主に正直に告白しました。実のところ、恐れる余地は全くなかったのです。この恐れは、不信仰からくるものであると、気がつきました。私は主に、ありのまま、

「主イエスさま、あなたが、私にはできないことを要求しておられるのではないかと思えてきて私は、悪い結果を恐れています。私には、とてもそれだけの強い信仰を持ってないのに、主が、私にはとうてい果せないことを、求めておられるのではないか、と恐れています」。



と、言ってしまった。主は、私の心の中のことも、なにもかも知っておられるからです。

イエスさまのお声が、私に話しかけました。

「あなたは、行って、『主が私をいやした。』と言いなさい。聖霊によっていやされることを、信じていない人々や、信じている人をばかにしたり、あざ笑っている人たちのところへ行って、『主が私をいやしてくれました。』と言いなさい。」

「はい、主よ、そういたします。」

そう言った時、とつぜん私は、主イエスさまが、私のそばに立っておられるのを、見たのです！

主が、私の視力を、まずはじめに回復してくださったことを、私は知りました。

私がお会いしたイエスさまは、お顔ははっきりとは見てとれませんでした。お姿の全身を現わ

してくださいました。

イエスさまは、静かに私に近づいて、ご自身の指先を私にふれられました。とその瞬間、主の指から発せられた聖霊の熱が、私の身体に流れ込み、熱くなるのを感じました。氷のように冷たかった私の身体を、頭の上から足の先まで火がかけめぐり、通りぬけていくのがわかりました。骨が碎けるかと思われ、節々がメリメリツと音をたてました。

それもそのはずです。私の筋肉は、まるでセメントみたいにコチンコチンでしたし、私の手足は、どこといわずねじまがり、身体全体が、大きな弓のように湾曲しているありさまでしたから。その私の骨を、主がまっすぐにしてくださいるのに、痛みなど問題ではありませんでした。

私は、ずっとイエスさまを見つめていました。主を見つめてさえいけば、充分でした——。こうして私は、ついにいやされたのです。それは夢のような、しかし疑うべくもない確実なできごと——まさしく奇跡でした！ 主が自ら訪れ、いやしてくださいだったので。

長い長い筋ジストロフィーという病魔との格闘、絶望をも、死線をものりこえて、あんなにも望み、願ひ続けたいた解放を、今、全能の神の恵み、イエスさまの力によって勝ちとったのです。私たちは、決して私たち自身の信念や力によって、このような勝利と解放を得ることは、できません。私たちの信仰の力によるということは、自分の側の信心の力や、祈願の力が、死の力を

打ち砕いたり、神さまのみわざをひき起こしたりする、という意味ではありません。

むしろそのような精神力は、主がスムーズに働かれるのを、妨げることさえあるでしょう。

私たちは、信頼するのです。イエス・キリストの中にある力、十字架の血潮によるあがないの真理、神さまから流れ下ってくる完全な命の供給と、イエス・キリストが内住してくださること、それらの神さまの恵みに満ちた事実を信頼して祈り、受けとることです。それこそが信仰です。

自分自身をまったく神さまにおまかせし、神御自身が、その偉大な力を現してくださいることに信仰を合わせるのです。自分が、神さまとその力を追求するのではなしに、すでに大きな神さまのみ手の中に置かれ、とり扱われている自分を知り、神さまの臨在の中で真剣に求める時、神さまは近ずいてくださり、神の力は容易に解き放たれます。

「しかし、わたしが、神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、

神の国はあなたがたに来ているのです。」（ルカ・11の20）

「人にはできないことが、神にはできるのです。」（ルカ・18の27）

さてイエスさまは、いやしてくださった後、私にたくさんのことを語ってくださいました。中でも、主が私に望まれたことは、三日三晩、病院にとどまるように、ということでした。

主は、私が完全にいやされたこと、主の救いと奇跡の力を、大たんにあかするようにと、お命じになり、またこのように言われました。

「私はもう、あなたをもとの生活には戻しません。あなたはこれからは、自分自身の人生を歩むことはできないのです。私についてあかすするために、あなたに新しい人生を貸しました。私があなたの世話をしますから、私に従って来なさい。」

私は、イエスさまから借りた時間の中に、住んでいます。でもそのことは、なんら私の束縛にはなりません。大切なことは、私が主に従うかどうかでした。主のご関心も、そこにありました。「イエスさまに、お会いしたそうですね。イエスさまと、どんなお話しをしましたか？」と、よく聞く方があります。そのたびに私は、こう答えることにしています。

「もし、あなたがイエスさまにお会いして、そのご臨在の中に置かれたならば、自分からなにかを語ろうとせず、主があなたに、なにを語ってくださいるか、注意深く耳をかたむけてごらん下さい。あなたが全神経をかたむけて、主のみ声を聞いたならば、その時主が語ってくださいましたことは、けっして忘れないものですよ。」

(七) あかしのため、歩きまわる

イエスさまが去られてから、しばらくの間、私はまだベッドから起き上げませんでした。

「イエスさまが、私をいやしてくださいました。」

と言うには、よほどの勇気がいりました。私には、人々にあかしすることができるほどの、心の準備がなかったし、周囲の人たちの方でも、聞く態勢をとってくれるとは、思えませんでした。

正直言つて、ラスベガスは、イエス・キリストの奇跡の働きを、見る準備がありませんでした。

私が、いささか臆びよう風にとりつかれ、もじもじしているうちに、意外なことに、ある人があの待ちに待った私のクツを、持って来てくれました。

私も、ついに決心がつかしました。そろそろとベッドから起き上がり、そのクツをはいたのです。

私自身、信じられないようなハプニング——私はついにクツをはき、立ったのです。主が以前、与えてくださった幻は、実現しました。

私が、ベッドから降り、クツをはいて歩き出そうとしているようすを、同室の人々が見つけ、

「ガーチャーさん、だいじょうぶですか？ 無理じゃありませんか？」
と、心配そうに聞きました。

「だいじょうぶですよ。今しがた、神さまから、力強く聖霊の力が注がれたので、じっとしているのが、むずかしいくらいです」。

と、私は答えました。身体が宙に浮いているような感じがし、歩くというより、フワフワとまるでバレエリーナのように、つま先立ちになって歩いていました。

そのまま病室の戸口まで歩いて行き、ろうかに出ました。ちょうど、私の姿を見つけた患者さんが、目を丸くして両手を上げ、叫びました。

「神に栄光あれ！ ごらんなさい。神が、ガートルード・タイサーになさったことを！」

私は、ゆっくりとろうかを歩いて、ホールにつきました。ホールにいたたくさんの人々が、私を見るなり、ひざまずいて祈り出しました。死の宣告を受けた者が、立って歩きはじめた証拠を見て、なん人もの人が、イエス・キリストを求めはじめました。

私は、そのまま進んで行き、まっすぐ看護婦室に入って行きました。看護婦の人たちをびっくりさせる気などなく、あかしするためにそうしたのですが、私の姿を見て、びっくりした数人の看護婦が、卒倒してしまいました。そしてみな、タンカで病室に運ばれて行きました。



彼女たちは、元気になってから私に言いました。

「ガーチャーさん、あなたは表情まで変わりましたよ。治る前は、まっ青な顔色で、目の下がはれ上がっていたのに、血色もよくきれいになりましたね。」

私が喜んでいたのもつかの間。病室に戻った私のところへ、例の婦長さんがやって来て、

「ガートルードさん！ あなたはこの病院にはいられませんよ。歩くことも座ることもできない病状という診断の結果、あなたには最後通帳が出ています。私は、それにサインしてしまいましたからね、あなたにお引きとり願わないと困るんです。あなたの診察は終わり、病院に居る許可は出ていません。」

と、言い渡しました。主とのお約束があるので、私は帰るわけにはいきません。

「婦長さん、私はここに居られるはずですよ。私は、婦長さんと同じくらい健康ですよ。見てください、私の手を。イエスさまが治してくださいだったので、もうマヒはなくなりました。」

「いいえ、あなたがそう長く生きられないことを、私は知っています。あなたは、ほんとにガートルードですか？ いったいなんん人の人が、看護婦室からここまであなたを運んだのです？」

「たったひとりです。」

「えっそれはだれですか？」

「イエスさまですわ。」

私は、すっかり答えました。このやりとりを見て、看護婦のひとりが、院長先生を呼びに行きました。院長先生は、私についてよく知っていましたから、私を見ると言いました。

「私もクリスチャンではないが、神さまがあなたを訪れ、この病院で奇跡をなされたというので、上を下への大きわざですよ。どうやら、ほんとうにイエスさまが、あなたを治してしまったようですな。病院側としては、治療の必要はないでしょう。なにか言う人があっても、それはあなたが治ったという事実にくらべれば、どうでもいいことでしょうね。」

主は、すばらしい！ 医学の専門家が、このように認めました。

神のみわざとしか、言いようのないそのいやしは、完全だったからです。医者も、薬も、歩行訓練も、松葉づえもいりませんでした。主は、ただ触れただけで、たちどころに治されたのです。翌朝、医者たちが、私の背中を診察にきました。寝たきりだった時間が長かったので、背中にできたうっ血がただれ、昨日まで、骨が見えるほど、ひどい症状でした。その背中を診察した医者たちは、おどろきの声をあげました。

「これは、確かに奇跡です。かさぶたもただれもすっかり消え、きれいな皮膚になっている！」
この完全なみわざのことは、すぐに病院中に知れわたり、またひとつあかしになりました。

医者たちが認める、もうひとつの新しい変化の中に、筆跡のことがあります。読みとりにくい字を書くのも、やっとだった私が、別人のように、すらすら美しい字が書けるようになりました。

さらにイエスさまは、おどろくべきしるしを、他にも残されました。ベッドのしるしです。

だれかがきて、私の寝ていたベッドにさわると、ビリビリとしたショックを受け、病氣も瞬間的に、治ってしまうのです。イエスさまは、いやしのため、私に聖霊を注いでくださった時、ベッドにも、聖霊の油を注ぎかけられ、信じない人たちが、信じるようにしてくださいましたのです。

また私は、自分から進んで、精神科医の診察を受けました。「あの人は、気が狂っている。」という中傷を、防ぐためです。カウンセリングが終って、医者のお見はこうでした。

「そうですね、あなたをこれ以上、調べる必要はないでしょう。もしなにかあっても、あなたをここまで治してください。あなたに解答を与えてくれるに、ちがいませんからね。」

死の国に向っていた私は、今確実に、神の国の中に住んでいる幸福を、味っていました。

(八) 後日談つきのあかし

歩けるようになった私は、また外に出て、庭の木々を見たいと思いはじめました。この願いが起きたことは、私にとってひとつの試みになりました。主のみに、従順になれるための……。

いつか婦長さんに、ストップされて以来、私は外気にふれたい、緑の中で思うぞんぶんさわやかな気分を味わいたいと、願いつづけていましたから、自分で行けるのを幸いと、庭に出かけました。

イエスさまは私に、三日三晩病院に止まるように言われましたが、外出のことについては、なにもおっしゃいませんでした。私もすっかりうちょう天になって、イエスさまに聞くのも忘れ、

「ああ、いい気持！ こうして緑の木をながめられるのは、いったいなん年ぶりか……」

と、ひとりごとを言いながら、木の下に立たずんでいました。ほんやりしていると、いきなり、「ガーチャーさん、ここで何をしているの？ 病院のろうかには、あなたがほんとうに歩けるかどうかを知りたくて、人が大勢集まって、ずっと待っていますよ。」

と、私をさがしに来た看護婦から、叱られてしまいました。

私もはっとして、つい自分のことばかり考えて、主の御計画にはずれた行動をしてしまった、と気がつきました。

イエスさまは、三日の間、なによりも優先させて、私ができるだけ多くの人々に、イエス・キリストの奇跡を、あかしすることを望んでおられたのです。あとのことは、この貴重な三日間の後にも、いくらでもできるのですから。

みなさんにもぜひ知っていただきたいのは、主の御計画、御心からはずれることは、人間にとつて、いかにたやすいか、ということ です。主の御心を知ると心がけ、祈りと信仰を働かせて歩むなら、主の計画は非常にスムーズに実現されてゆき、主はとても喜んでくださいます。自分を喜ばせるか、主を喜ばせるか。しかし、主の喜びこそ、確実に私たちの喜びになるのです。

——私があわてて病室の方へ戻った時、まっ先にこの目に入ったのは、車イスに座っている黒人の患者でした。私が彼に近ずくと、彼は私を見ながら、

「あのう……車イスから落ちないように、くくりつけられたかっこうで、この病院に通っていたのは、あなただったんですか？」

「はい、私です。」

「あなたはひどいケイレンで、時々ベッドから、ころがり落ちていましたね？」

「ええ、確かにそんな状態でした。」

「……そう言えば、あなたはたぶん、目が見えなくなって、全盲になったと聞きましたけど。」

「はい、途中から、まったく盲目になりました。」

私は、ありのまま答えました。彼は、少し考えると、

「ガートルードさん、イエスさまのことを、どうぞほくに話してください！　ほくは、イエスキリストについて、ほんの少ししか、知らないんです。」

と言い出しました。——イエスさまのもとに、ひとりの魂が立ち帰る——なんとこの祝福！

「……ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」

(ルカ・15の10)

その後、私が喜んで主をさんびしながら、ろうかを歩いて行くと、手術室のドアの前あたりで、タンカに乗せられて行く、ひとりの男の患者に出会いました。彼は、手術を受けるために、今、まさに手術室に入ろうとするところでした。彼は、私が以前、全身マヒだった時のことを、よく

知っていました。ですから、私が歩きながら、主をさんびしている姿を見た時、彼は、

「おお、神がガートルードを、あんなに完全に治せるなら、私のことも治せるはずだ！」

と、叫びました。そして彼は、シート一枚だけを身にまとって、手術室行きのカンカの上から、するりとすべり降りると、自分の病室の方へ、すたすたと歩いて行ってしまいました。

起きたことを理解できずにいる看護婦や、同室の人々におかまいなく、彼は手ぎわ良く身仕たくをすませると、まっすぐ自分の家へ帰ってしまったのです。

あれよあれよという間のことで、みんなもこの光景をながめ、彼の後姿を見送るばかりでした。後日、私が退院して二年ほどたった頃、道の途中で、ばったり彼に出会いました。

「あら、あなたはあの時の！」

「おや、たしかあなたは、あのガートルードさん！」

「私、聞いてみたいと思っていんですけどね、あの時、手術を受けないまま帰って、その後いかがでしたか？」

「はい、なんともありませんでしたよ。私は手術する必要がある状態だったんですけどね、なにしろあなたが神にいやされて、元気になった姿を見たたん、『主がいやしてくださいさる！』と、心から信じられたんですよ。そうしたら、手術など、必要なくなってしまうましたよ。イエス・

キリストのいやしの方が、手術よりよほど効きましたね。」

「まあ、そうでしたか。でもあの時あなたは、手術寸前で、麻酔がかかっていたはずでしたが。」

「ああそれはですね、きっと主は、私が主の奇跡を受け入れることを、あらかじめ知っておられたのです。私が主の奇跡を信じた時に、主は私の身体から、麻酔の効力をとり去ってくださいました。イエスさまは、完全に私を健康にしてくださいました。あなたのようにね！」

(九) イエスさまに従います

私が病院にいた三日三晩、主は、実にあざやかに働いてくださいました。

連日連夜、イエス・キリストのすばらしい奇跡のあかしを聞きたいと、たくさんの人たちが、私の病室におしかけてきて、病室の中もろうかも、黒山の人だかりになりました。

「それで多くの人が集まったため、戸口のところまですきまもないほどになった。この人たちに、イエスはみことばを話しておられた。」（マルコ・2の2）

という聖書の記事を、私は思い起こし、みことばの真実と、イエスさまの時代の光景を想いめぐらして、深い感動を覚えずにはいられませんでした。——人々は、昼も夜もろうかに殺倒し、明け方までがんばっている人たちも、いたほのです。そして、ほんとうに感謝すべきことは、人々の関心事が、私ではなく、イエス・キリスト御自身と、その力にあったということです。

あかしをしている日の間、イエスさまは、なによりも私に、主のみ心に従順であり、聖霊の導きに素直に従うことを求められました。また、大たんに、恐れず臆せず、イエス・キリストの証人として立ち、あかしを語ることを望まれました。私がちゅうちよしていると、主はうながされ、従うと、いつも勝利とよろこびを豊かに与えてくださいました。

——いやしが行われた翌日のことですが、イエスさまは私に、

「マーティン氏のところへ、行きなさい。」

と言われました。マーティン氏とは、病院で一日八時間、私たち患者を管理している人です。彼は、私が主にいやされた日は、休暇で出勤していませんでした。私は彼の事務室に行きました。「マーティンさん、私を見てください。イエスさまが、治してくださいましたんです。」

と、室の入口に立って、私は言いました。しかし、マーティン氏は、ふり返ろうともせず、私に背を向けて、言いました。

「病室へお帰りなさい。」

しかたなく私は、すぐごと自分のベッドまで戻りました。ところが再び主が、

「マーティン氏のところへ、行きなさい。」

と言われるのです。私は、「はい。」と答えて、また彼の室まで歩いて行き、入口に立つと、

「マーティンさん、私です。イエスさまが、完全に治してくださいました。見てください。」と言いました。しかしマーティン氏は、やはり背を向けたまま、はねつけるように言いました。

「この室から出て行きなさい。私は、あなたを見たいとは思わないんでね。」

やむなくろうかを引き返して来ると、三度目に主が語られました。

「マーティン氏のところへ、行きなさい。」

主の導きの声に従うには、勇気がいりましたが、私は足を返して彼の室の入口まで戻り、

「マーティンさん、どうか私の方を見てください。さきほどからイエスさまは、三度も私に、『マーティン氏のところへ、行きなさい。』と、おっしゃいました。私は、三度も足を運んでいます。

あなたは、私の病室からここまで、かなり距離があることをご存知ですね？ ですから、どうか私を見てください。」

と、切実になって言いました。さすがのマーティン氏も、今度はふり返って、

「あなたを見ましょう、ガートルードさん。」

と答えました。そして、彼は私をながめ、ややびつくりした表情を浮べてから、言いました。

「……実は、私が休みだったきのう、病院では、多分あなたが死ぬだろうと予定していた日でした。それで、さつきあなたが、はじめにここまで来てくれた時、ほんとうにあなたかどうか信じ

にくかったんです。いや、なんとというか複雑な気持ちでね……。」

しかし今は、彼も確かに私を認めたのです。

「あなたが二度目に来られた時、私は、いやしの奇跡のうわさを、耳にしていました。正直言って、私はカトリック信者なのです。私の教会では、病気のいやしとか、死者の復活とか、奇跡などを信じません。」

マーティン氏はさらに、自分自身は今まで、特別に奇跡を求める必要を感じなかったし、あまり関心がなかったが、教会の中には、神の力の現れや、奇跡を求める声もある、と言いました。マーティン氏としては、カトリックの大聖堂の中で、奇跡が起こるのを見たいものだ、と思ったこともあった、とつけ加えました。

神さまは、そういった宗教的な場所ではなく、都会の一病院内という、弱さの中で苦しみ、主の力をすぐにも必要としている人々の中で、実際に神を知らせるため、みわざをなさいました。イエス・キリストの愛は、宗教的形式や戒律、精神修養などによって現わされるものでなく、現実のまっ只中で、苦しみと死の縄目にもがく広範な人々のため、解放の働きをするのです。

マーティン氏が言いました。

「ガーチャー・タイサー、私が見た時、イエス・キリストが、きのうも今日も変わるこ

とがないお方であることを、認めないわけにはいきませんでした。私は今日にでも、イエズスさまが、病院の私の部門の中でさえ、奇跡を行われていることを、告白しなくてはなるまい——と考えていましたよ。」

言い終わるとマーティン氏は、急に明るい声になりました。

「さあ、なにかをやりましょう！ あなたのお子さんたちを呼びよせましょうか？ それとも、あなたのこの日のために、今まで祈ってくれた婦人たちを呼びましょうか？ さあともかく、なにかしうではありませんか、主のために！」

私たちは、主が私たちを訪れた事実を知る時、主のために、じっとしてはいられなくなります。なにかしいでは、いらなくなるのです。マーティン氏も、やはりそうでした。

マーティン氏は、その後カナダに帰り、その地においても、イエス・キリストによる奇跡が、同じように起こることを期待し、疑わないでいるということです。

主とのお約束の最終の日、主のみ声に従うかどうかの最後のテストがありました。イエスさまが「三日三晩……」と、病院にいる期間を定められたので、私は主治医に、その日付と時刻で、退院願書を出しておきました。ところが主治医は、

「ガートルードさん、病院では、あなたの病気について、もっとよく調べ、検査することにしたので、あと一ヶ月は入院しててください。」

と言うのです。つい先日は、婦長から即刻退院を言い渡されたのに、主とのお約束を守り屈しなかったから、主が助けてくださり、院長の心を動かしてくださったのに、今度は、主治医から、延長を申し渡される……私は、人の言葉でなく、主の御計画に従う決心をせまられました。

「先生、イエスさまは私に、三日三晩だけ、この病院に止まるようにとおっしゃいましたので、どうしても、その日時の退院許可証をいただきたいのです。」
と、主治医に頼みこみました。

「……ふむ、やむをえませんな。」

主治医もしぶしぶ承諾し、私が、めでたく退院手続きの書類にサインできる間際になって、医務室の電話のベルが鳴りました。看護婦が受話器をとり、

「院長先生からです。」

と、主治医にとりつごうとしました。すると主治医が、

「受話器をふせて、ちょっと待っていただきなさい。もし私が、今ガートルードさんについて院長と話し出したら、長いこと論争しなくてはならんだらうからね。そうするうちに、ガートルー

ードさんの主が、退院命令を下した時間は、オーバーしてしまうだろう。私としては、その責任をとることは、さけさしてほしいんですよ。」

と、言いました。

イエスキさまは、万物を従わせうる力の働き（エペソ・1の19〜22）をもって、ご自身のお約束を果してくださいかったです。ハレルヤ！

最後に、私にとってたいへん感動的だったエピソードを、お伝えしましょう。

——孫のトムが、病院にやって来た時のことです。

ちやうど私は、用があつてスロープのあるろうかを、降りていこうとしていました。すると下の方から、トムが登ってくるではありませんか。

「トム、トムじゃないの！　ごらんよ、主が私にしてくださいだったことを。ほら、こんなによばらく治してくださいだったのよ。」

私は思わず、喜びの声をあげました。私の横をすりぬけて行った人が、

「まともに聞いちゃいけないね、まったく。」

とわる口をとばして行くのもよそに、トムときたら、あつ気にとられてつつ立っているのです。そして、私をながめていたと思つたら、パタンと倒れてしまいました。気絶したのです。

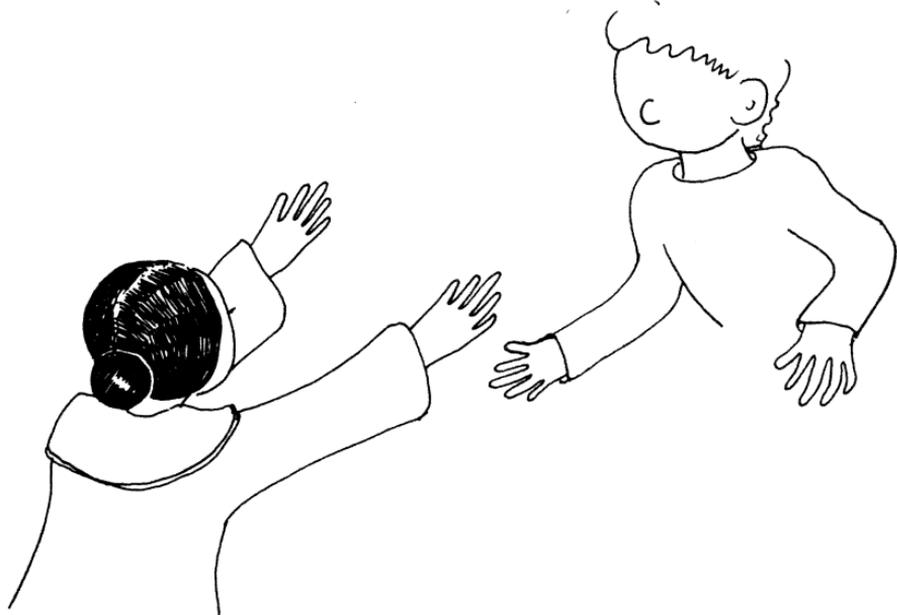
「まあ、トム、どうしたの？」

私の方がうろたえていると、じきにトムは起き上がって、おどろきの声で言いました。

「びっくりしたなあ、ガーチャーおばあちゃん、だって、しゃんしゃん歩いているんだもの。ほく、小さい頃から今日まで、おばあちゃんがまともに歩いている姿なんて、見たことなかったよ。おばあちゃんはいつも、車イスに乗ってたり、ベッドで、片方の足の吹き出物を、もう片方の足でこすったりしながら、寝たつきりで苦しんでばかりいたんだから……」。

「イエスさまのおかげよ、トム。」

「それにしても、なぜ病院から、臨終のしらせが来たのだろう？ ほくは今日、おばあちゃんが死にかかっているというので、身元引き受け人



になるために、ここへ来たんだ。でもおばあちゃんは、こんなに元気じゃないか。」

「ああトム、それはね、私がイエスさまにいやしていたのは、病院からあなたあてに、最後通知がしられた後だったからよ。」

「それなら、すぐにもほくあてに、こう連絡してくればよかったよ。『ガートルード・タイサーは、その後、イエス・キリストによって、完全にいやされました。』ってね！」

(完)

おわりに

ひとりのキリストの証人、ガートルード・タイサーが語っている、彼女に起きた奇跡の体験のあかしは、実に、今も働かれるイエス・キリストの实在を、あざやかに教えてくれるものです。

“イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現わされた。それで、弟子たちはイエスを信じた。”（ヨハネ・2の11）

“もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る。”（ヨハネ・11の40）

主イエスは、神の子たる事実と、神の力を行使できる特権とを、その地上における伝道生涯の間にも、たびたび奇跡を行うことよって、実証なさいました。またそれは、奇跡を見た人々が、イエス・キリストを神の子と信じて、救われるためでもありました。

奇跡は、説明しがたい神のわざであり、人々の悲願への、神からのみごとな解答と言えます。

しかしながら、人類の歴史始まって以来、最大の奇跡と言うべきものは、イエス・キリストの十字架のあがないを信じた人が、救われることです。そして、今まで神を認めなかった人々が、神の祝福の中に入って、喜びと希望にあふれた人生を、歩めるようになることです。

「神の指」は、肉体の病や痛みばかりでなく、人の心にも、こわれかかった家庭にも、社会の病魂にもふれ、いやし、健康な姿に回復してくださいませ。

もし、この本を読んだ方々の中で、自分も神の救いと祝福に入りたい、と思う方がおられましたら、次のようになさることをおすすめします。

- ① イエス・キリストの名を呼び、祈って罪を悔い改め
 - ② イエス・キリストを、救い主として信じ、告白し、主を心にお迎えします。
 - ③ 自分の人生を、イエス・キリストの導きにおまかせし、
 - ④ さらに、正しく福音を伝えている、健全な教会に行き、聖書を読み、
 - ⑤ 教会の牧師やクリスチャンの友と、親しく語り合い、神の愛の中で霊的に成長してください。
- 主はあなたに、しっかりとした人生の目的を持たせてくださり、神の中に自由に生きられるよう、日々助け、力をつけてくださいます。

この本を読まれた方々が、神を認め、「信じない人」ではなく、「信じる人」へと変革され、

すばらしい「救いの体験」という奇跡を、ぜひ味わっていただきたい、と願います。

私はこのあかしを、数年前、アメリカに行った際、福音誌「ニューワイン・マガジン」によって知らされ、ぜひ、日本に持ち帰って、多くの人々に伝えたいと思いました。

このたび、その願いが実現され、クリスチャンングロース・ミニストリーの許可を得て、このようなかしのドラマとして、出版される運びとなりましたことを喜び、主に感謝いたします。

また発行にあたり、深沢教会印刷部の方々の、ご協力と労をいただきましたことを、感謝するものです。

新宿シャローム教会牧師

稲 福 エ ル マ

神の指がふれた時

定価200円

1980年12月10日 初版印刷発行

©クリスチャングロースミニストリー

証 詞	ガートルード・タイサー
翻 訳	シャローム教会翻訳委員会
編 集	アガペー書店出版部
発 行	
発行所	アガペー書店
	〒160-91
	東京都新宿郵便局私書箱246
	Tel03-371-3190
	振替口座 東京 7-187162
印 刷	深沢教会印刷部
製 本	Tel03-704-4052

